平成 28 年 10 月号　№480

なかま

発　　行
佐倉市立中央公民館
編　　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話（043）485-1801

川中島古戦場での雑感---------- 飯島　康弘
便利に使おう---------- 渡辺　都夫
大多喜城・久留里城めぐり------- 大川　輝子
三つの坂への想い---------- 吉田　順子

ああ、今でも悔しい！

坂田　和孝

ゴルフは止まっているボールを引っ叩き、グリーン上のカップに入れる。言うのは簡単だが一筋縄では行かないスポーツである。自然が相手で季節、天候、コース状況など様々な要因で結果が左右される。加えて自分自身の心理状況が大いに影響する実にメンタルなスポーツである。その一方で思いがけない幸運に恵まれたりもする。

そんなゴルフだが大抵のゴルファーには、そのプレーや結果等で〝ちょっと聞いて欲しい、語りたい話〟が、あるのではないでしょうか。私の〝そんな話〟を書きますが、大した記録でないことをあらかじめお断りしておきます。

いま私は身体を痛めた為、プレーしなくなりましたが、かつては程々に練習し月に1回程度コースに行く、なかなか100の切れないゴルファーでした。

ある年の6月末、会社の先輩と取引先の方々と北海道のコースに出かけた時のことです。その日天候は良くまずまずのコンディションでスタートしました。ダブルボギーのスタートはまあまあの滑り出しです。次のミドルホールは運良くパーとなりました。その後も大きなミスはなく前半は4ホールでパーを取り、スコア44で上がり、気分は上々です。後半になってもなぜか好調で、また最初のミドルホールがパーです。その後も自分で驚くほどの調子で、いつもはパーなど取れないロングホールも加え、なんと8ホールでパーを取ったのです。そして自己最高の調子で最終のミドルホールを迎えました。

第1打ナイスショット、第2打もまずまずでグリーン近くまで行きました。そしてここから〝ドラマ〟が始まったのです。ここまでのスコアは83です。このホール、ダブルボギーで上がってもトータルスコアは89です。もう絶対大丈夫と思った時、これからの〝プチ自慢〟として「自分は90台を飛び越えて一気に80台に突入」という文句が頭の中を駆け巡り始めたのです。第3打目となるアプローチはグリーンを下に見る斜面からでダフってしまいました。でもまだ大丈夫。次で寄せて2パットで89の新記録達成だ。そして気合を入れて打った次の一打は、なんとグリーンオーバー。その後もミスが続き、結局このホール8打を叩き80台への飛び越えとはならなかったのです。その後も、とうとう80台にはなれずじまい。何か教訓的でもあるが、いま思い出しても悔しい・・・。

（編集委員）

川中島古戦場での雑感

史跡案内で、川中島の戦略は自衛隊にも参考にされている程との紹介文を読んで、現地を見てみようと思い付き行ってみることにした。

資料によると、上杉領の穀倉地帯であった川中島一帯を武田信玄が攻め込んで占領した事が始まりで、前哨戦は25日間もの陣取り、睨み合いの駆引きとなっている。

松代城を武田が押え川中島一帯を占領→謙信は、松代城を見下ろす妻女山（さいじょさん）で睨みを利かせ、信玄が甲府より出てくるのを待伏せの体制を取る→信玄は急いで出てきたが、迂回して妻女山の謙信の退路を遮断する茶臼山に陣を敷く→退路がないと死に物狂いになるので、早々に信玄は松代城に入り妻女山と睨み合いを続ける→信玄が妻女山に夜襲をかけるも失敗、川中島の戦いが早朝から始まる。

資料を手に、川中島古戦場、松代城跡、山本勘助の墓、妻女山の展望台、茶臼山の麓を順次回る。1万からの軍勢で良く25日間も睨み合ったのは、統率力があったこと、また、謙信が移動した時、気付かれなかったことは武田側の斥候（せっこう）が居なかったのか、妻女山から松代城は丸見えで、逆に妻女山は見上げるため見えにくく、動きにくい状況にあったのに先に動いたのはなぜか？また、謙信が夜襲のため、炊煙が上がるのを見て夜襲を見破ったとあるが、武田側の動きは丸見えでなかったのではないか等、勝手に思い、感じ、楽しんで帰ってきた。

一緒に行った妻も、結構楽しかった様で「また別の古戦場に行きたい」との話。

あれこれ考える雑感も、たまには良いのかと感じた2日間であった。

（南臼井台　飯島　康弘）

大多喜城・久留里城めぐり

晴天に恵まれた春の日、佐倉の湧水23のメンバー9人は、房総の大多喜城を目指し出発。

大多喜町に近づくと、車窓から平山城の三層の天守閣（昭和50年再建）が望見される。天文期に里見氏重臣の正木氏居城として発展するが、その後、徳川家康の江戸入りに伴い、家臣の本田忠勝に与えられ10万石の藩へ、後に松平家（大河内）2万石の藩となる。

館内は忠勝の肖像画や本多家縁の調度品等が展示されている。城の4階部分から見渡すと夷隅川に守られるようにできた城下町が今も原形を残しており、「房総の小江戸」とも呼ばれている。

城の北側大多喜高校の駐車場にある当時造られた大井戸は、周囲17㍍深さ20㍍の日本一大きな井戸で日本の三大井戸の一つと言われている。

大多喜町を後に養老渓谷に向かい粟又の滝を遠望、街道沿いには黒湯の温泉宿が点在する。一路久留里へと向かう。

JR久留里駅前に到着し、観光交流センター前の水汲み広場で平成「名水百選」の名水を試飲、透明だがやや硫黄のような臭いがある。「名水の里」の名のとおり市街地の至る所に名水・井戸があり、新町の井戸・高澤の水などを巡回し、久留里城に向かった。

二層の天守閣のある山城の久留里城は昭和54年に再建された。天正期より里見氏・大須賀氏・土屋氏・黒田氏の3万石の居城であった。

資料館の模型をみると大手門・本丸等は自然の川が堀のような役目をしている中に建てられた堅固な城だったことが窺える。二の丸から本丸へ向かう尾根道からの新緑の景観が素晴らしかった。

名物のタケノコをお土産に、各城をめぐり往時の繁栄に思いを馳せた一時であった。

（西志津　大川　輝子）

便利に使おう

初老の男がスマホを手に入れた。以前は若者たちの道具と思い興味がなかった。若者達が常にスマホを使っている姿を見るとなぜか腹が立った。周りに迷惑を掛けている訳ではないが、貴重な時間の多くをスマホに費やしているように思えたからだ。

ある大学の学長が入学式で、スマホをやめるか大学をやめるかと切り出した。「本を読み、自分で考え自分の知識で根本から考え、独創性豊かな学生に成ろう。スマホで無為に時間を費やす機会が増えている。スマホ依存は知性、個性、独創性にはプラスにならず、脳の取り込み情報は低下し早く時間が過ぎる」との話で、初老も、可能性を秘めた若者に、スマホに過度の頼りすぎは問題ありと同感した。

しかし、その初老も、何時でも何処でも使えるスマホが便利でのめりこんだ。株式の動向、ニュース、話題、知りたいことや疑問に思うこと等、すぐに解説が手に入る。疑問を持つことから知識が広がり頭脳が回転しているようにも感じる。

いまでは趣味の京都の寺院神社を調べ、歴史、宗教、偉人と徐々に調査範囲は広がっている。スマホで調べて要約してノートに書き写すと記憶にも止まり、書くことで漢字も覚えボケ防止には最適と思う。遊び心で継続させ、綴ったノートを貯めたいものだ。

最近、高齢者のスマホ利用拡大でスマホトラブルの詐欺被害が増えているそうだ。便利になればなるほど詐欺に遭う可能性が広がる。トラブルに遭わぬよう注意して楽しく便利に利用していきたい。

（藤治台　渡辺　都夫）

三つの坂への想い

昔「人生には、上り坂・下り坂・まさかの坂の三つの坂がある。これを超えて一人前」と聞かされました。

今、地域活動で独居高齢者のお宅訪問をしています。その人たちの日々を過ごす姿勢から、多くの事に気付き、学ばされる事があります。

例えば、99歳の女性は、殆ど室内の生活です。午前中は、日刊３紙を裸眼ですみずみまで読み切り、私が訪問すると、待ち兼ねた様子で、豊富な話題を大声で笑い聞かせてくれ、部屋の雰囲気を明るくしてくれます。

95歳の男性は、昔から油絵が趣味だったことを、作品を見せながら「もう駄目だ」と諦めた様子でした。最近、再び絵筆を持ち始め、絵に関わる思い出話などを嬉しそうに話されます。

お二人が過ごした時代は、日本の混乱期であり、多くの人々はどれ程、厳しく困難な山や坂を乗り越えた事かがうかがえます。

しかし、お二人の様子には、乗り切って来た力を自信にしています。今の生活を前向きに充実させ、堂々とした姿勢には感動を覚えます。

過日、昔は特捜の辣腕検事として活躍し、現在ＮＰＯ法人の福祉事業で活躍中の堀田力さんの講演を聞きました。内容は「普段から介護を受ける状態にならない努力。若し、介護が必要になっても介護する事を困難にしない努力」と強調され印象的でした。

私自身、多くの坂道を超え、これからもあるかも知れない坂道を、前向きに味わいながら歩みたいものです。最後に、どんな坂にも意味があり、危機をチャンスと捉える知恵が欲しいです。

（ユーカリが丘　吉田　順子）

１０月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先
佐倉市立中央公民館　TEL: 043-485-1801　FAX: 043-485-1803
〒285-0025 佐倉市鏑木町 198-3
E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp
URL: http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集し、市民カレッジ情報コースの卒業生が文字入力を行っています。

さくら道

先日、姫路の高校の同期生から、卒業50周年の同窓会開催の案内状が届いた。

たいした自覚もないままに、与えられた教材の棒暗記に明け暮れた高校生活の中で、サクラが満開の姫山公園を自転車で通った記憶が懐かしい。姫路城を当たり前の如く受け止めていたが、今では贅沢な環境だったと思う。

それでも高校卒業時には、技術屋の人生を選択し、上京してからの大学・社会人生活は、山あり谷ありの変化に富んだものとなった。

佐倉に転居してから30年、姫路に似た城下町の風情が気に入って、今の自宅を終の棲家と受け止めている。

今年3月に退職し、カレッジ生となってからは思わぬ文化生活を楽しんでいる。

今秋の同窓会では、昔の仲間と語り合い、最近の姫路の街並みを散策してみたい。

（北山　仁志）

あとがき

市民カレッジにはクラス毎にメンバーの多数が何かしらの委員に就く仕組みがある。

なるべく楽な委員に就こうと、役割も良く知らず、迂闊に手を挙げてしまい『なかま』の編集委員になった。後で任期は数年と聞き、驚き後悔している。結果的に欠席しつつも1年余を過ごさせてもらった。

編集委員は、投稿して頂いた原稿の誤字脱字などの訂正を中心に添削・編集する。その際、作者の持ち味を活かしつつ原稿が直せればと、努力している印象である。十数名もの目と知恵を出してチェックしているが、逆にそれが裏目に出て、誰かが目を通していると誤認し、未訂正や入力ミスを見過ごしたケースもあった。責任感は強いのだが、私のように不慣れな委員もいる。おおらかな気持ちで投稿し、愛読していただけたら幸いなのだが。

（田島　誠）